第三章　　柳橋出会（しゅっかい）茶屋

一

朝まだき、坂崎磐音が九ヶ月ぶりの懐かしい音を聞いていた。

竹刀（しない）と竹刀の打ち合わされ、竹刀が防具に叩く鈍い音である。そして、間断（かんだん）なく気合いが重なった。

神田三崎町で直心影流の看板を三代に渡って掲げる佐々木道場に、大名家の家臣や幕臣旗本の子弟（してい）たちが多く通っていた。

磐音は豊後関前藩から剣術修業を許され、三年間汗を流した。最初の一年は住みこみ稽古、残りの二年は江戸屋敷から通いながらの修業である。

途中から小林琴平と河出慎之輔が加わった。

帰国に際して佐々木玲圓道永は、最後の稽古をつけてくれた。そして、国許の中戸信継のもとでさらに稽古を積むよう、戒め（いましめ）の言葉とともに目録を磐音と琴平に授けてくれた。

藩政を一新する望みを抱いて江戸を痕にして九ヶ月足らず、磐音の身辺は大きく変化していた。

磐音は羽織を直すと門を潜った。

この頃、佐々木道場は門弟（もんてい）の数と、厳しい稽古により、江戸随一の道場として知られていた。

玄関横の庭では素足（すあし）で木剣（ぼっけん）の素振りを繰り返す若い門弟が二人いた。これは足裏に体の運びと、動きを覚えこませるためだ。

ふたりとも磐音の見知らぬ顔であった。

磐音が式台の前で一礼すると草履を脱ぎ、備前包平を腰から抜いた。

早朝、関前半の通い稽古の門弟たちはまだ顔を見せない刻限だった。

百余畳の道場では、二十数名の弟子たちが延び延びと続く打ち込み稽古を繰り広げていた。

磐音は板の間の端を上段の間に向かった。すると、神棚（かみだな）の前に正座して弟子たちを見守っていた佐々木玲圓の視線が磐音を認めた。

道場の端に正座すると板の間に額を擦りつけた。

不意に稽古の音がやんだ。

平伏する磐音を静寂が包んだ。

「坂崎磐音、頭をあげよう」

「はい」

磐音が顔を上げた。

師の視線が磐音を見詰めた。

師弟は長いこと無言の会話を繰り返した。

（よう戻ってきたな）

豊後関前藩で神伝一刀流の道場を開く中戸信継を通じて、磐音らに起こった悲劇のすべてが玲圓に伝わっていた。

磐音は師を拝顔した。

（お懐かしゅうございます）

「磐音、相手せよ」

玲圓が不意に立ち上がった。

「はっ、はい」

脇差しを抜き、羽織を脱いだ磐音に、内弟子の一人、今戸永助が木剣を差し出した。

「お借りする」

稽古を中断していた門弟たちが道場の左右の壁に下がって正座した。

師と弟子は道場の中央に立った。

師匠も弟子も正眼を取った。

磐音は頭裏に、

「己はこの場に立つ資格があるのか」

という疑いを去来させた。

道場は剣を修業する者にとって清浄なる場であった。

佐々木は常々、

「剣の修業は人を斬るためのものにあらず」

と教え諭してきたのだ。

この九ヶ月、磐音が藩命や生計（たつき）のためとわいえ、血を見る戦いを繰り返してきた。

磐音の五体には死の臭いがこびりついていた。

「参る」

相正眼の佐々木玲圓は声を発すると、巌（いわお）のように押し寄せてきた。

直心影流の流祖山田平左衛門光徳一風斎（やまだへいざえもんみつのりいっぷさい）と兄弟弟子の祖父佐々木周太月湛（しゅうたげつたん）からもう稽古をつけられ、才能を開花させた玲圓道永は、

（炎の剣）

として江戸の剣術界に知られていた。

全身からメラメラと熱を放射しながら師が磐音に殺到してきた。

その瞬間、磐音は踏み込みつつ、師の攻撃を迎え撃っていた。

木剣と木剣が絡み合い、乾いた音を発した。

玲圓は、

（これは…）

と思いつつ、二撃目を右の肩口に落とした。

磐音が払った。

今度は磐音が仕掛け、玲圓が払った。

使徒で絵師は目まぐるしく攻守所を変えながら、木剣を振るい続けた。

どちらかが受け間違えば、致命的な怪我をした。いや、死さえ想起させるほど激しい打ち合いになった。

居眠り磐音、居眠り剣法のいわれは、

（待ちの剣）

の剣風からだ。だが、対決する磐音には、柔らかく受け流す居眠り磐音は感じられなかった。玲圓の攻撃に耐えながらも無意識のうちに反撃の機を窺っていた。

玲圓の木剣から炎が立ち上った。

連鎖した攻撃が鋭さを、激しさを、早さを増した。

磐音は師が炎と化したとき、初めていつもの自分を取り戻していた。

無意識のうちに秘めた攻撃の構えを捨てた。

無念無想、受けの剣が戻ってきた。

炎と水が正確無比（せいかくむひ）にぶつかりあっていた。

四半時以上も続いた。

門弟たちは固唾（かたず）を飲んで凝視（ぎょうし）していた。

玲圓の木剣が磐音の眉間に鋭く落とされ、磐音が力を殺ぐ（そぐ）ように受けた直後、玲圓が磐音の傍らを駆け抜けて、くるりと反転した。

「引け、磐音！」

言葉を聞く前に磐音は床の上に屈して頭を下げていた。

「みたな」

玲圓が門弟立ちを見回した。

押し堪えた息とともに

「はっ」

という応答が道場に響いた。

磐音は井戸端で顔と手足を洗った痕、師匠の居間に通された。

玲圓が稽古着から普段着に着替えて姿を見せた。すると間合いを見ていたように熱い茶と梅干し（うめぼし）が供された。

運んできたのは、内弟子の今戸永助だ。磐音の弟弟子にあたり、出羽（でわ）山形藩から剣の修業に来ていた。

玲圓が茶碗を取って茶を喫した。

「磐音も飲むがよい」

と許しを与えた。

そのせい声音（こわえ）は実に優しかった。

「先生」

と言いながら師範代の浅村新右衛門が入ってきた。

その顔に興奮が漂っていた。

「それがし、長年道場に関わってきましたが、あのように炎がメラメラと燃え上がる試合を拝見したの初めてにございます」

玲圓が静かに頷いた。

「居眠り磐音の剣法は、新たな域を得たな」

生死の境を潜り抜けた経験を得られた境地と、その場にあるものは知っていた。

その時、磐音が孤独を感じていた。

師のもとに帰るべき途が絶たれていた。

「先生、己の無能を悟っています」

その場を去ることができずに残っていた永助が吐露した。

「永助。磐音に恐れを抱いたのか」

「はい、江戸を発たれた時の坂崎様ではありませぬ。違ったお方がここにおられます」

今戸の顔には畏怖（いふ）と尊敬があった。

「永助、剣の道は一筋ではない。百人おれば百通りの修行仕方が、到達すべき境地がある」

「はい」

「そなたはそなたの道をみつめるのじゃ」

「はい」

「い‘わねが豊後関前をでたと中戸先生より便りをもらうたとき、直面すべき現実から逃げたのかと心配致した。杞憂であったわ」

玲圓が静かに破顔した。

「いえ、にげたのでございます」

磐音は正直に答えた。

玲圓は首肯すると茶を飲んだ。

「磐音、そなたの長屋に押し入った者がいるそうではないか」

と訊いた。

「よくご存じでございますね」

「なあに、昨日、南町の与力どのがこちらに参られて、あれやこれやとそなたのことを聞いていかれた。あの御仁（ごじん）、ここに来る前にそなたの長屋も訪ねたとか。武家姿の泥棒が貧乏長屋に押し入ったことを不思議がっておられたぞ」

笹塚孫一は坂崎磐音を奉行所に待たせて、矢場あらしの隠れ家（かくれが）をと同時に磐音の身辺を徹底的に調べあげていた。なんとも油断のならない男だ。

「磐音、そなたが深川六間堀に住んでおることを知らせてくれたのは勘定奉行所の日村綱道どのでな」

やはり、と磐音が頷いた。

「そのことを承知しているのはそれがしと、ここにおる浅村だけだ」

師範代の新右衛門を見た。

「磐音、すまぬことをした」

新右衛門はいきなり頭を下げた。

「おれはな、うっかりとそのことを、豊後関前藩の江戸屋敷の使番（つかいばん）畦蔵多門（あぜくらたもん）どのに喋ってしまった。そなたの身辺にそのような大事が起こっていたとは全く知らなかったのだ。昨夜先生に聞かされて、己の口の軽さを恥じ入っていたところだ」

新右衛門は何度も詫びの言葉を口にした。

畦蔵は佐々木道場の古い弟子の一人だ。

「浅村様、どうぞご懸念なく…」

と磐音は新右衛門に言い返すと

「先生、長屋に入ったのは豊後関前藩の者だと思われますか」

と尋ねてみた。

「そなたの身過ぎ世過ぎは笹塚どのから、なんとなく聞いた。どう考えてもそちらの関わりとも思えぬ。それでな、あの与力どのに伝言を頼んだのじゃ」

「そうでございましたか」

「磐音、そなたは豊後関前藩と関わりを絶ったつもりでいるかもしれぬ。だが、相手はそうは考えておらぬのではないか」

「それがしには思いあたるところがございません」

「ならばよいが…」

玲圓はそう言うとその話題に蓋をした。

その夜、唐傘長屋におきねの通夜が行われた。

磐音が顔を出すと、矢場金的銀的の朝次とおすえの夫婦が悲痛な顔で、おきねの父母の傍らに座って話していた。

磐音は放心したままの両親に悔みをいうと、おきねの亡骸に線香を上げた。

「坂崎さん、大家さんの家におよしたちもいる。あって行ってくれませんか」

朝次がいった。

頷いた磐音が九尺二間の長屋を出ると、幸吉が何人かの子供と一緒に井戸端に立っていた。

「浪人さん、こいつら、おきね姉ちゃんの弟と妹たちなんだ」

磐音が頷くと

「おきね姉ちゃんに代わって、そなたらが父上や母上を助けるのだぞ」

と言いながら一番小さな女の子をなでた。

「坂崎さん、こっちだ」

長屋を出てきた朝次が大家に案内する気か、木戸口に向かった。

「親方、それがしがもう少し用心棒稼業を続けるべきであったな」

「私ももっと娘立ちの身辺に気を配るべきでしたよ。お互い言い出せばきりがない」

そういった朝次がくるりと振り向くと、

「昼間に、えらくちびっこい南町の与力がふらりとうちに顔を見せて、昨夜のことを告げて行きましたぜ。おきねの仇を坂崎さんは立派に討ってくだすったんだね」

「そのようなことくらいしかそれがしはできぬ」

「だれにでもできるこっちゃありませんや」

「親方の胸だけに仕舞っておいてくだされ」

朝次がうなずいた。

磐音は宮戸川に鰻裂きに通う日々に戻った。

給金は日当七十文だが、たっぷりした朝餉がついた。だから、夕刻に雑炊（ぞうすい）を炊いてたべるだけでなんとか一日がしのげた。だが、一日七十文で殺ぐせるわけもない。

朝次からもらった一両一分一朱は、一両を柳次郎に返して一分一朱が残った。それも使い果たした。

「なんとかしなければ」

そんなことを考えながら、磐音はその日も宮戸川の裏口を出た。

（だいぶ朝風呂にも行ってないな）

と思いながら六間堀に出ると、品川柳次郎が堀端に立っていた。

「鰻割きは終わりましたか」

頷いた磐音が言った。

「品川さんはしじみ採りをしていたそうですね」

「寒い上に銭にならないのでやめました」

柳次郎はあっさり言うと、

「新手の仕事を見つけました」

「それは良かった」

「坂崎さんも一緒です。おれ一人ではできないのでね」

「なにっ、それがしも」

磐音は思わず喜びのけを上げた。

「やりますか」

「懐には、今もらったばかりの七十文しかありません。また家賃を溜めてしまいましたし、なんとかしなければと考えていたところです」

「仕事先は川向うです」

二人は足早に本所深川を抜けると東広小路に出た。

今日も広場には朝市が立って賑わっていた。

「俺の爺様は、なかなか顔の広い男でえ、御家人のくせにお店者から大工の棟梁（とうりょう）となかなか多彩な交わりを持ってました。揉め事を内緒で解決したりして重宝（ちょうほう）がられ、金に困ったことはなかったそうです」

両国橋を渡りながら、柳次郎が言い出した。

「ところがその倅（せがれ）の親父ときたら甲斐性なしだ。いつだってうちに銭があった試しなんてありやしない。一方、おふくろは愚痴しか言わないような女で、小言（こごん）を聞くのがいやさに親父は釣り竿を抱えて外に逃げる。釣れようが釣れまいが、おふくろと顔を合わせなければいいのです。」

柳次郎が初めて家庭のことに触れた。

「親父に釣り仲間が射ましてね、元大工町の蝋燭屋の明石屋参左衛門です。この男、還暦を超えてなかなかの道楽者（どうらくもの）だそうです。四、五年前に女房が死んだのをいいことに品川の若い女郎を身請けして、家の蕎麦に囲った。おきくは二十…」

「だいぶ年が離れていますね」

柳次郎の仕事というのがわからないまま、磐音は相槌を打った。

「四十を離れてます」

「で、何か問題が生じましたか」

「参左衛門は、近頃おきくが外に男を作ったようだ、浮気（うわき）をしているというのです。それを釣り仲間の親父に相談しましてね、親父が暇な倅を働かせようと、俺を説得してうまく手を引かせたら、明石屋はそれなりの金を用意するというのです」

柳次郎はどうだという顔で磐音を見た。

「間男（まおとこ）を探す男ですか」

「いやですか」

「そんなことを言える余裕はありません」

「それはこっちも一緒だ」

「おきくどのに男がいなかったら、おかねになりませんね」

「それはこれからの交渉次第です」

「もし駄目ならばどうします」

「参左衛門がそんな了見の狭い老人なら考えがあります」

「……」

「おきくに男がいたことにして、苦労して説得し、手を引かせたことにしてもいい。まあ、なんとでもなりますよ」

柳次郎がいい加減なことを言った。

磐音も他に仕事の当てがないのだから、黙ってついていくしかない。

二

日本橋の元大工町の蝋燭屋明石屋は創業百余年の老舗（しにせ）で、店構えっも堂々としており、番頭立ち奉公人もしっかりと躾がなされていた。

店先にはお寺用の三百目掛け、百目掛けの大蝋燭から、懐紙蝋燭、仰願寺（こうがんじ）蝋燭などと呼ばれる小蝋燭まで大小（だいしょう）が取り揃えられ、絵入り蝋燭も品数が揃っていた。

柳次郎が番頭に名を名乗ると、話が通されていたようですぐに奥座敷に上げられた。

庭も京風の小粋（こいき）な造りで、南天が赤い実を見せていた。

女中が茶を運んできて、下がっていた。

更にしばらくして、

「お待たせしましたな」

と明石屋参左衛門が姿を見せた。

鶴のように痩せた長身（しょうしん）に白髪頭がのり、飄々とした風采だった。

「どちらが品川様のご子息かな」

柳次郎が頷くと、

「それがしは品川清兵衛の次男柳次郎にございます。また同道いたしましたるは坂崎磐音、それがしが兄と私淑（ししゅく）する人物でしてな、腕も一流なら、人柄も信頼がおけます。」

参左衛門が小さく頷くと二人を観察するようにじっと見た。

「用件は父上から聞かれましたか」

「ご愛妾（あいしょう）おきくどのに男がおるとのこと」

参左衛門が瓜のように長いかをを縦に振って首肯した。

「確証がおありですか」

「勘です」

「それだけで…」

「さよう」

「例えば金遣いが荒く、何に費消したかわからぬとか。お囲いになっている家に男が深夜出入りしているとか…」

「ございません」

と参左衛門は顔を横に振った。

「勘違いということもありますな」

「いえ、確かです」

柳次郎が困った顔で磐音に助けを求めた。

「明石屋どの、おきくどのはその昔、品川に出ておられたということですが、江戸の生まれですか」

「いえ、在所は武州八王子宿、おきくの父親は千人同心の小者だったのですが、病にかかって職を失い、日野宿に移り住んだ機会に、自ら望んで品川に身を売った女でしてな。品川の遊木亭には一年半ばかりはたらいておりました…」

「一年半の苦界（くがい）暮らしは短いようで長い。馴染みの男はいかがでござるか」

「遊木亭の主の吉蔵は私と遊び仲間、変な虫がついているようなら身請けを勧めはしません」

「明石屋どのが望んだのではなく、游木亭の主に身請けを勧められたのですね」

と老人は頷いた。

「とはいえ、格別に妓楼（ぎろう）の主の口車に乗ったわけではなかった。ですが、会ってみるとおきくのきめ細かな（きめほそかい）肌に魅かれました。同衾（どうきん）するとなんとも吸い付くようなしっとりとした肌で、これは私が打ち止めにしてもいい女と確信しました」

参左衛門はしれっとしてこんなことまで口にした。

「品川時代の悪い虫はいない、と」

「おりません」

「おきくどのを身請けして、どれほどになりますか」

「九ヶ月と十三日です」

「いつ頃からおきくどのに男がいると感じられるようになったのですか」

「三ヶ月前からです」

「なにかきっかけがございましたか」

「若いおきくは、私が身請けした事を大層（たいそう）喜んでおりました。ええ、それは確かです。お手当ても月に五両、盆暮れ（ぼんくれ）の小遣いを含めて八十両です。住まいと小女（こおんな）の費用は別です。おきくは私に断り、月に二両を日野宿の家のもとに送っております。うちの番頭が送金の手続きをいたしますから、間違いはございません…」

参左衛門は一旦言葉をきって、茶を啜った（すする）。

「話は前後しますが、八王子から日の宿におきくの一家が移り住んで数カ月後、父親はなくなりました。享年四十六でございましたそうな。」

参左衛門はおきくの父親よりも遥かに年上ということになる。

「一周忌に日野宿におきくが戻りました。ええ、私が許したのです。おきくは７日後に、多摩川で捕まれた鮎（あゆ）を土産に帰ってきました。その夜、ええ、私はおきくの体を久しぶりに抱きましたよ…」

柳次郎がごくりと唾を飲んだ。

「何が変わったというわけではありません。だが、確かに日野に戻る前とおきくの反応が違ってます。」

「そ、そこが大事なところです。どのように違うのですか」

柳次郎が身を乗り出して訊いた。

「そこがな、どうも説明にくい」

参左衛門が長い顔をひねって思案した。

「体を合わせたとき、おきくから伝わってくる感触が微妙に違う」

「例えば、あの時に漏らす声が違うのですか」

柳次郎が真剣だった。

「違いましたな。よそよそしいというのではない。ひょっとしたら、嬌声は前より大きくなったかも知れん。だが、三ヶ月前のおきくの反応とどこか今は違うのです。」

「明石屋どの」

磐音が言い出した。

「おきくどのは主どのとの暮らしに落ち着きを見出されたのではありませぬか。遊所から身請けされて、安住の場所を得られた。実家にも戻り、亡き父親の法要も済ませた。そして、再び江戸に、主どのの元に戻ってこられた時、そこをわが家と考えられた、そんなとき、おきくどのは女から女房のような存在に変わったのではありませぬか」

「お若い方、あなたが言われる事も分からぬではない。だがな、それとは違う。私のように身代（しんだい）を女に注ぎ込んだ（そそぎこむ）男にだけわかる裏切りの感覚なのです。」

「小女はこちらが世話をされたのでしたな」

「お女にも問い質しましたが、首を横に振るばかり…」

「分かりました」

柳次郎がその会話を打ち切った。

「明石屋どのは我らにおきくどのの男を探し、手を引きせよともうされるのですね」

「おきくは女遍歴（へんれき）をしてきた私が最後に選んだ女です、死に水をとってほしい。そのために、それなりのことを考えてもいる。そなたら、おきくの相手を穏やかに説得して、完全に手を引かせることができますかな」

「明石屋どの、お菊どのに情夫（いろ）がいるとしてそれを別れさせるには、結局は金かと」

「百両、いや二百両まで払う用意があります」

柳次郎に参左衛門が言った。

「その為にはまず相手をさがさねばならない。昼もよるもおきくどのの行動を見張ることになります」

「おきくを囲った数寄屋町の家の表口にうちの家作（かさく）があります。その一軒をあけてある、自由にお使いください。」

「妾宅（しょうたく）には表口の他に裏口がありますか」

「いけばわかるが、裏の塀にそって一間の溝川がながれておってな、出口は表しかない。」

「見張りは楽ですな。委細（いさい）承知しました。」

と柳次郎が頷き、

「我ら二人で昼夜の見張りにあたります。そこでご相談ですが…」

「日当は一人二分。相手を突き止め、うまく事を終えた際には成功報酬として十両ずつを払いします」

さすがに老舗の主、柳次郎の言葉を半分聞いて即答した。

「承知」

柳次郎が満足そうに答え、磐音が訊いた。

「明石屋どの、この江戸出おきくどのが付き合いをされている方をご存じありませんか」

「江戸の知り合いといえるのは、游木亭の頃の朋輩くらいでしょう。だが、身請けした折り、品川とは一切関わりを絶つことを、おきくにも遊木亭にも約束させましたでな、付き合いはなかろうと思います。

磐音はしばらく考えた末に訊いた。

「遊木亭を訪ね、吉蔵どのに話を聞きしてもようごあいますか」

参左衛門がしばし沈思したのち、いいでしょうと頷いた。

その昼下がり、坂崎磐音は一人東海道の最初の宿場、品川宿にいた。

明石屋をでた二人は手代（てだい）に案内されて、おきくが住むという小体（こてい）の家の玄関口を見通すことのできる二階長屋に入った。

半年前まで、豆腐屋が入っていた長屋には、夜具の他に何もなかった。三度三度飯は明石屋の下女が届けてくれることになった。

磐音は柳次郎を二階長屋に残し、周辺を調べて回った。

表口のほかは左右とも隣家の塀に接し、うらには一間の溝川が流れていた。

磐音は更に町内を回って、妾宅（しょうたく）の裏手にあたる表通りに立った。すると小間物屋と炭問屋の間にある幅半間の路地が、おきくの家の裏手を流れる溝まで通じているのがわかった。

磐音は入り込んで調べた。路地には二軒の商家の裏口賀設けられて、炭問屋は荷なだおを運びこむ通路としても使っているようで、天水桶の傍らに炭の粉が落ちていた。

路地は溝川に突き当たり、一間の流れの向こうに黒板塀が切り立って出入りを塞いでいた。それを確かめた磐音は東海道を西行して品川宿に到着したところだった。

品川宿は最初、目黒川（めぐろがわ）を境に北品川と南品川の二つに分かれてた。が、宿場の規模が大きくなるにつれ、新たに善福寺門前町と品川新町を合わせた徒歩（かち）新宿が加わり、三宿でそれぞれ宿場の昨日を分担することに鳴っていた。

品川宿の飯売り旅籠九十余軒のうち，遊木亭は南と北を分かつ（わかつ）目黒川の右岸（うがん）、品川宿一丁目に店を構える中どころの遊郭（ゆうかく）であった。

磐音が遊木亭の玄関先に立つと、二階からだらしなく寝間着を着た年増女が下りてきた。

「まだ、店開きには早いよ」

と注意した。

「いや、客ではない。主の吉蔵殿にお目にかかりたいのだ。明石屋どのの知り合いと申してくれ」

女は大欠伸すると、

「この刻限、川っぺりにいるよ」

と言った。

「川岸に、散歩でござるか」

「釣りだよ、釣れもしない釣りが道楽なのさ。首に真綿（まわた）を巻いて釣り竿を振り回しているのがいたら、それが旦那だ」

「面倒かけたな」

磐音が表口からでようとすると、

「三和土を通って裏に抜けたほうが早いよ」

と土間の隅から裏の台所に抜ける通路を指し示して教えてくれた。

「かたじけない」

「お侍さん、今度さ、客でおいでな」

「懐に余裕があったためしがなくてな」

「おやまあ」

女の声を背に暗い通路を台所に抜けた。するとそこでは台所女中たちが遊女の遅い朝飯を準備していた。

「おかねさん、そのお侍さんを裏口に出してやって」

崎ほどの遊女が台所の飯炊きに指図して、磐音は遊木亭の裏庭に出た。

高い板塀が、漬物樽などが積まれた庭を囲んでいた。

飯炊き女が、塀に設けられた裏戸を指し示し、磐音はそこから外へ出た。

潮の香りが混じった風が吹き付けてきた。

目黒川が海に沿って北側へと曲がり、その右岸が品川の海に並行して砂州のように伸びていた。

見回すと男が一人釣りをしていた。

「吉蔵どのでこざるか」

「へえ、遊木亭の吉蔵なら私ですがね」

吉蔵は浮き（うき）を見詰めたまま答えた。

犬は目も開けようとしなかった。

「それがし、明石屋どのの頼みで参った坂崎磐音と申す者にござる」

「参左衛門の旦那の頼みとは、なんですか」

吉蔵は丸っこい顔を磐音に向けた。つるりとした顔は陽に焼けていた。

磐音がおきくについて参左衛門が感じている疑いを話し、

「われら、明石屋どのの申されることが今ひとつ解せぬ（げせる）。そこで、遊び仲間で、おきくどのの旧主の吉蔵どのにお伺いに来た次第。」

「旦那がそんなことをねえ…」

「明石屋どのは、こちら荷折られた時の馴染み客などはっきり縁を絶ったといわれる。だが、江戸のおきくどのにはこちらにしか知り合いはないという」

「うちの客とおきくが今も逢瀬（おうせ）を重ねているということはありますまい。おきくは家族のために遊女になったが、決してそのことを快く思っていたわけではないからね。それがすぐにわかったから、私は旦那に身請けしないかと話を持ちかけたんだ。旦那は最初乗り気じゃなかった。どちらかというとおきくのほうが、うちから出られることを望んでいたくらいだ。まずおきくが外に男を作るとは考えにくい。」

吉蔵は首を捻った。

「となると、明石屋どのが疑心暗鬼になっておられるだけであろうか」

「旦那とは若い時分（じぶん）からの博奕（ばくち）仲間でね、旦那の勘の鋭さは生半可（なまはんか）じゃない。女遊びもなかなかのものだ。その旦那がおかしいというんなら、一概に若い妾にベタぼれした老人の世迷い（よまい）とも思えんな」

吉蔵はそう言うとしばらく考えこんだ。

「もしおきくが心を許した朋輩がいるとしたら、おきくよりも一月前に身請けされたおちえかな」

「おちえどの」

「おちえはおきねの姉さん株でね、新下谷町の鳶（とび）の小頭、小吉親方に身請けされたんだ。おきくはこのことがあったから、旦那との身請けに乗り気になったとも言える。」

「おちえどのとおきくどのは、吉蔵どのの見世（みせ）におられるとき親しかったのですか」

「一緒にいたのはせいぜい一年でしょうな。親しかったかどうかはなんとも言えないが、おちえがいろいろとおきくの相談に乗っていたことは確かだろうな」

「おちえどのを訪ねてもよろしゅうござるか」

吉蔵は磐音を見た。

「ほんとはおちえの名を明かすのも私どもの仕事ではご法度（はっと）だが、参左衛門の旦那の頼みでもある。坂崎さんとやら、重々気をつかってくださいよ」

「吉蔵どの、それがし、おちえどのに迷惑をかけるようなことだけは決していたさぬ」

吉蔵は大きく頷いて、頼みましたよと言った。

新下谷町は品川宿からの帰り道にあった。

愛宕（あたご）権現社（ごんげんしゃ）の裏手、大名屋敷や旗本屋敷の多い西久保通りに車坂町（くるまざかちょう）とこんg剤した、小さな町内だ。

鳶（とび）の小頭小吉の住まいは新下谷町の裏手の二階長屋だった。

磐音が訪ねた時、姉さん被りの女が着物の洗い張りをしていた。

鳶なら当然仕事に出ている刻限である。

「おちえどのにござるか」

初々しさ（ういういしい）を素顔に残した女が頷いた。

「それがし、坂崎磐音と申す。ご迷惑は承知の上で、おきくどののことでお邪魔いたした」。

おちえの顔に不安がよぎった。が、それはすぐに消えた。

「おきくちゃんに何かありましたか」

おちえの顔に浮かんだ不安は、時分の過去を知っている者が現れたというものではなかった。おきくのみに何かが起こったかと懸念する思いが不安の表情を漂わせたようだ。

「いえ、幸せに暮らしておられます」

磐音が否定するとおちえが、

「立ち話もなんです、家にお上がり下さいまし」

と答えて、ほっと安堵の様子を見せた。

「主どのの留守にそうもいかぬ」

「ご心配には及びません、小吉にはどんなことでも話しますから」

おちえがよく磨き上げられた格子戸（こうしど）開けて、小さな三和土から板の間にあがった。

「ならば、それがし、ここにて話を伺おう」

磐音が格子戸を開けたまま、上がりかまちに腰を下ろした。

頷いたおちえが、よく拭き掃除された板の間に座した。

「おきくどのが身請けされたことをご存じか」

いえ、知りませんでした、とおちえは驚きの色を見せた。

「そなたの旧主吉蔵どのは、もしおきくどのが悩みや何かを相談するとしたら、そなたしかおらぬといわれた」

「侍さん、おきくちゃんの身に何が起こったのです。正直に話してくださいな」

磐音は昼下がりの裏長屋の路地にしばし視線を預けて迷った末に、視線をおちえに戻した。そして、子細（しさい）を告げた。

話を聴き終えたおちえはしばらく沈黙を守っていたが、

「私、参左衛門旦那も存じております」

と言った。

「おそらくおきくちゃんは今の暮らしを何よりも大事に、大切にしたいとおもっているはずです。私、わかるんです、あんな世界にいた女が自ら掴んだ道です。相手との歳の差とか、顔が不細工（ぶさいく）とか、そんなことはどうでもいい。あの参左衛門様が間男（まおとこ）の疑いを持つほどにおきくちゃんに惚れた、そのことはおきくちゃんも絶対に承知しています…これが大事なことなんです」

「そなたは、おきくどのが外に男を作ってはおらぬと申されるのだな」

「はい」

とはっきりと答えたおちえは、

「私の知るおきくちゃんはそんな馬鹿な女ではありません」

と言い足した。

「邪魔をいたした」

磐音が立ち上がると、

「「おちえどの、末永くお幸せにお暮らしくだされ」

と頭を下げた。

数寄屋町の明石屋の家作（かさく）に戻ったとき、夕暮前だった。

「どうでした」

二階の障子を薄く開けて、裏手の妾宅（しょうたく）の出入りを見張る柳次郎が訊いた。

「うーん、どこも明石屋の疑心だと申すのだがな」

磐音は品川から新下谷町で聞き知ったこと告げた。

「おれはそうおもうな」

柳次郎が両手を伸ばすと、

「小女を連れて、町内の湯屋に行ったっきりで、牡猫一匹近付く気配はありません」

「おきくどのはどんな感じの女ですか」

それだ、柳次郎が叫んだ。

「ありゃ、遊び人の参左衛門がめろめろになるはずだ」

「美形なのですか」

「美形とは違うな。だが、小股が切れ上がって、目になんとも色気がある。それに肌が白くて、指先で押すとふわりと真綿（まわた）に包まれる用な感じだ。男なら一苦労したくなる女さ」

「品川さんの説明では今ひとつ分からぬな」

「坂崎さん、あれは見るしかわかる手立てはない」

柳次郎はそう言うと何度も頷いた。

三

磐音がおきくの顔を初めて見たのは、明石屋参左衛門が夕刻姿を見せて、それを出迎えたときだ。

薄暮の中、小さくて白い顔が浮かび、磐音の背筋にぞくりとしたものが走った。

（これは…）

「震えがくるほどいい女でしょう」

柳次郎が羨ましそうに言った。

「品川にいる時に知っていたら、どんなことをしても金を工面（くめん）して馴染みになったんだがな」

「いや、それはどうかな…」

磐音の頭に、

（魔性の女…）

という言葉が浮かんでいた。

「おきくどのには近付かないでほうがいい」

「どうしてです」

「そう問い返されても困る。そう思おうからです」

「明石屋はあの女に騙されていると言うんですか」

「騙すとか騙さぬとかではなく、明石屋どのを破滅の淵（ふち）に連れて行くような気がする」

「坂崎さん、女に対しては初（うぶ）のようですね」

柳次郎が言い、

「それは認めます」

と磐音も正直に答えた。

明石屋参左衛門がおきくの家にいたおは二刻ほど、４つの鐘がなる前に玄関口に姿を見世、おきくに見送られた。

「今日はなにもないな」

お女が戸締まり（とじまり）をしていた。

柳次郎と磐音は明石屋の下女が運んできた下げ重の飯を食い、柳次郎は添えられていた徳利の酒を茶碗でちびちびと飲んだ。

「坂崎さんは鰻裂きの仕事がある、先に仮眠してください。」

柳次郎の言葉に甘え、早々に飯を食した磐音は部屋の隅から夜具を持ってきてごろりと横になった。

柳次郎はちびりちびりと酒を飲みながら、小粋（こいき）な造りの家の玄関を見て、一刻半を過ごした。

起こされた磐音は９つ半から７つまで、柳次郎の鼾（いびき）を聞きながり見張りを務めた。

七つ半前、磐音は柳次郎を起こして。

「深川に戻ります」

と言った。

「妾の朝は遅いのが相場だ。朝風呂くらい入ってきてください」

柳次郎の言葉に送られて、まだ暗い町に出た。

数寄屋橋から日本橋を渡り、早足で魚市場から富沢町の古着屋町へと、江戸を南西から、北東に突っ切って両国橋にでた。

橋の上を早春（そうしゅん）の風が吹いていた。

冷たさの中に春を感じさせる予兆が篭っていた。

「坂崎さん、顔が腫れぼったいね」

宮戸川の鉄五郎親方が目敏く（めざとい）見抜いて言った。

「昨日よりちと別の仕事を…」

「徹夜をなさったんですかい。手を切らぬようにな」

鉄五郎が鰻裂きで気を散らすなと注意した。

この朝、宮戸川にかなりの量の鰻が持ち込まれ、磐音、松吉、次平の三人は二刻以上も鰻と格闘した。

終わったのは４つに近い。

台所に一人朝餉を掻き込み、早々に宮戸川を出た。とても風呂に入る余裕はない。長屋にも寄らず、数寄屋橋に戻った。

「そんなに慌てて帰ってくることもないのに」

柳次郎が欠伸で迎えた。

そんな繰り返しが２日続いた。

三日目、昼下がりにおきくは外出した。

薄紫の地の江戸小紋を着たおきくは、新妻（にいづま）のような香気（こうき）と色気をそこはかとなく漂わせていた。

江戸の町を南から来たに突っ切り、上野の不忍池（しのばずのいけ）のほとりに出た。

柳次郎が磐音に、

「この辺りは出会い茶屋も多い。密会には持ってこいの場所ですよ」と囁きかけた。

おきくは池の南端（なんたん）を西に上がって湯島の切通に入っていた。

「やっぱりおきくには相手がいましたね」

柳次郎がほっとしたような安堵の声を上げた。が、無警戒なおきくが足を止めたのは、湯島天神（てんじん）別当（べっとう）の喜見院前の花屋だ。

おきくは黄色の菊を求め、閼伽桶（あかおけ）を借り受けると、山門を潜って墓地（ぼち）に入っていた。

「違ったかな」

二人は遠く離れた場所から見ていると、慣れた足取りで古びた墓の前に立ち止まり（たちどまる）、墓の手入れを始めた。

「おきくが喜見院の墓に参りましたか」

磐音から訊いた参左衛門は複雑菜顔をした。

「ありゃ、死んだ家内の墓でね。いつか亡くなられた奥様の墓参りがしたいから寺を教えてくれと、おきくに聞かれたことがあった。まさかあれが本当に墓参りをしているとはねえ」

「その足で数寄屋町に戻られました」

「そうでしたか」

磐音は参左衛門の継の言葉を待った。しばらく間があった後、

「これまでどおりに見張りをお願いします」

という申し出であった。

おきくの身辺を見張るようになって５日目のあさ、磐音は宮戸川の鰻裂きを終えて久しぶりに六間湯に朝風呂に行った。

柳次郎から、

「坂崎さん、体に鰻の臭いが染み付いてますよ」

と注意されたからだ。

井戸端で丹念に洗い落としているつもりだが、何百匹も鰻を扱うと肌に染みこむのかもしれない。

そこで馴染みの六間湯で長風呂をして体中を丁寧に洗った。湯屋をでるとつるつるのかおがひりひりした。

金兵衛長屋にもどると褞袍を着た大家の金兵衛が、

「お客が待ってますぜ。長屋に通しておいたがね」

と言った。

「客、ですか」

思い当たる人物はいなかった。ともかく長屋の腰高障子を引き開けると、四畳半にぽつねんと一人の武士が座り、位牌を見詰めていた。

磐音が戻った気配に横顔を向けた。

「上野伊織ではないか」

「坂崎磐音」

二人は互いの名前を呼び合い、顔を見つめ合った。

豊後関前藩江戸屋敷の勘定方を務める伊織は、磐音が主宰していた修学会の仲間の一人であった。

無論河出慎之輔も小林琴平も承知していた。

中老職の嫡子（ちゃくし）磐音は六百三十石を継ぐ身、ゆくゆくは藩の幹部になるべき男だった。

伊織は勘定方六十七石と軽輩だった。

が、江戸やし出の修学会の交わりでは重役の倅も下士（かし）も互いに呼び捨てであった。出席者の年が若かったことと、藩改革を共同して行うという気概と志がそうさせていた。

「国許の騒ぎ、江戸屋敷にも伝わってきた。その時の驚きたるや藩邸じゅうがひっくり返らんばかりだったぞ」

磐音が小さく頷いた。

「最初はそなたら三人が闘争に及んだなどという話でな、なんとも訝しく感じたが、だんだん上方が伝わり、全貌（ぜんぼう）がはっきりしてきた…」

そういった伊織は三柱の位牌を眺めた。

「磐音、そなたの気持ちは察するにあまりある。だがな、なぜ藩を暇乞いなどした。そなたには堂々として国許に残って欲しかったぞ」

「伊織、終わったことだ」

伊織が磐音を見った。

「終わったことか」

「そうだ、俺の中では全て決着がついた。残ったのは３つの位牌だけだ」

「そうだろうか」

伊織が呟くのを無視して、訊いた。

「そなたは、おれがこの長屋に住んでいることをどこから聞いた」

「使番（つかいばん）の畦蔵多門（あぜくらたもん）様が、そなたが六間堀の金兵衛長屋に済んでおると教えてくれた。だがな、この辺りは不案内だ、２日も３日も探した」

「それはずまぬことをしたな」

謝った磐音は、

「藩邸でおれが六間堀に住んでいること承知しているのは、あなたのほかにおるか」

「畦蔵さまは使番という職にありながら、口の軽いお方だ。おそらくかなりのものが、そなたが六間堀に射ることを承知していよう」

と答えた伊織は、

「なにか不都合（ふつごう）か」

と訊いた。

「年も押し詰まった三十日、ここに押し入って長屋じゅうを引っ掻き回して言った二人連れがおる。見てのとおりの貧乏暮し、お金の蓄えなどない」

伊織が磐音の顔をじっと見た。

「二人連れは大名屋敷の家来と思える武家であったそうな」

伊織が膝をぴしゃりと叩いた。

「それみろ、だから言うたではないか。そなたらが巻き込まれた騒ぎの後始末は何も終わってはおらぬ」

「慎之輔も琴平も舞どのも死んだ。その他にもご番組頭の次男山尻頼禎ら多くの命が失われた。河出も小林ノイエも廃絶（はいぜつ）になった…」

「騒ぎの大因は何だ」

「舞どのの不義の噂を散らした山尻の次男が原因であろう」

「磐音、真実そう思うか」

「ほかになにがある」

伊織は両眼を閉じてしばらく沈黙した。そして目をつぶったまま、言い出した。

「おれはこの事件が起こったあと、あんども考えた。この江戸で、国許で起こった事件の流れを正しく把握することは適わぬ。だがな、おれは、そなたも慎之輔も琴平も知っている。そなたらが子供の頃から兄弟同様に交わってきたことを、羨望（せんぼう）を込めて見ていた人間だからな。それがなぜ相戦うことになったのか」

「すべては運命、天の気紛れ（きまぐれ）だ。」

「磐音、騒ぎの背後に作為（さくい）があったとしたら何とする」

「作為ではない。山尻頼禎といううつけ者（うつけもの）が奈緒どのに懸想（けそう）して断られた腹癒せ（はらいせ）に、姉の舞どのの不義話を撒き散らしただけのことだ」

もはや磐音には思い出したくもない話しだった。それを伊織はなぜほじくり返そうというのか。

「磐音、よく思い出せ。そなたら三人を品川宿まで送っていった時の話だ。そなたは国許に戻ったら、慎之輔や琴平、国許の仲間立ちの協力を得て藩政の改革に着手すると熱く語り合ったな」

「そんなこともあったか」

「磐音のお父上は中老職、河出、小林の両家とて豊後関前藩のなかなかの家柄、そなたらが本気に慣れば藩政改革のための新しい企てもできる。なによりそなたには分別も思慮も人徳も備わり、肝も据わっておる。」

「父は中老職を辞職なされたと風の噂に聞いた」

「お父上が届きを出されたのは確からしい。だが、殿がお許しにならなかったそうな」

「そうであったか」

と答えた磐音が話を元に戻りました。

「何が言いたい、伊織」

磐音が苛立って聞いた。

「それを嫌った（きらう）御仁がそなたら三人を相戦わせ、自滅させたとしたら何とする」

磐音はぽかんとした顔で伊織を見た。

言葉も失っていた。

「そんな馬鹿な話がと思うか」

「…当たり前だ」

「ではなぜこの長屋が襲われた」

「それは…」

「答えられまい」

「我らが江戸屋敷で続けてきた修学会を快く思わぬ方が、江戸にも国許にもおられたということか」

「磐音、そなたらの騒ぎのあと、江戸藩邸での修学会はご重役の命で中止になった」

「なんと、そのようなことか…」

「磐音、国許の事件は綿密に計画されたものと思わぬか。そなたらはある意図を持って巻き込まれたのだ」

伊織は何度も考えてきたことなのか、はっきりと言い切った。

磐音が両眼を閉じた。

（そのようなことがあろうか）

豊後関前藩は、藩祖が蓄財した万が一の際の備蓄金を使い果たし、大阪の蔵元に銀二千六百貫（およそ四万二千両）の借財（しゃくざい）に加えて、江戸の札差し（ふださし）にもかなりの額の前借り金があった。

この負債の総額は関前藩の実収（じっしゅう）の三年分に当たった。

磐音たちは関前の物産の流通経路に変えて、これまでばらばらに売ってきた干し海鼠（なまこ）、干し鮑（あわび）、干鰯（か）、半紙（はんし）、椎茸（しいたけ）などを藩の物産所に集荷させ、それを借り上げ弁才船（べんざいせん）で上方や江戸に運び込んで増益する計画を軌道（きどう）に載せたばかりだった。

修学会の成果である。

磐音は国許へ戻り、さらなる産業の奨励と物産の一括流通の強化を図る考えを持っていた。

無論国許には、これまで同様に城下の商人たちの繋がりをたいせつにしようという守旧派の重役立ちもいた。

例えば国家老（くにがろう）の宍戸文六（ししどぶんろく）はかつて関前の復興（ふっこう）の礎（いしずえ）とまで言われた人物だが、老境に入り、独善的で偏狭な判断を示して、藩政にしばしば支障を来してきた。

磐音たち若手の藩士の改革に守旧派が反対するのは目に見えていた。

だが、磐音の考えには藩主福坂実高（ふくさかさねたか）も賛意（さんい）を示して、

「関前の再生にはそなたら、若い知恵と力が要る。磐音、頼んだぞ」

とまで仰せられて、江戸藩邸を送り出されたのだ。

（国許の守旧派の力を甘く見たか）

目を開けた磐音を伊織がみていた。

「伊織、少し時間をくれぬか。考えたい」

伊織がうなずき、磐音が忠告した。

「もしそなたの考えが当たっているなら、伊織、そなたは身辺に気を配らねばならぬ。この長屋にも二度と訪ねてはならぬ」

わかったと答えた伊織が、

「そなたと連絡を撮りたいとき、どうすればいい」

と訊いた。

宮戸川か今津やか、磐音は思案した。

豊後関前藩の上屋敷は御城の北、駿河台にあった。

神田川沿いに下りてくると浅草御門のある両国西広小路に出る。

宮戸川は深川で橋を渡ってこなければならない。

「浅草御門の蕎麦に両替商の今津屋があるのを知っておるか」

「磐音、それがしは勘定方だぞ。両替商がどこにあるかくらいは承知しておる。」

「ならば老分の由蔵（よしぞう）どのか、奥向きの女中おこんさんに、手紙なり言付けなりを頼んでくれ。すぐに連絡がつくようにしておく。」

「分かった」

と返答した伊織が、

「そなた、金がないと申したな。それが、豊後関前藩程度では洟もひっかけてはくれぬ両替商と付き合いがあるのか」

「今津屋とは昵懇（じっこん）の仲だ。遠慮は要らぬ」

磐音はちっと見栄えを張ってみた。

「そうか」

とあまり信用したとは思えない伊織が、

「藩邸に戻る」

と立ち上がった。

「おれも仕事に行かねばならん。一緒に参ろう」

二人は方を並べて金兵衛長屋を出た。

「仕事は何をやっておる」

足早に深川六間堀唐両国橋を目指した。

「いろいろだ」

磐音が目下（もっか）の仕事の鰻裂きと妾の見張りを話すと、

「なんと豊後関前藩の中老職を継ぐはずの男が、鰻裂きに、妾の間男の現場を押さえる仕事だと」

と笑い出した。

「今津屋との昵懇の仲も怪しいものだ」

「伊織、勤番のそなたとは違う。長屋の家賃も払わねばならぬ、風呂代もかかる。食うていくためには仕方がないではないか」

「これはすまぬ」

二人は両国橋の雑踏を縫うように東から西に向かった。

しばらく無言だった伊織が、

「奈緒どのの行方を承知しておるか」

と訊いた。

「小林も河出の家も廃絶になあって、残された家族は城下を出た。おれが琴平都の戦いで傷を負い、臥せっておる間のことだ」

「知らぬと申すのか」

磐音が頷き、訊いた。

「伊織、知っておるような口振りだな」

「つい最近国許から江戸に出てきた同僚が去年の騒ぎに詳しくてな、あれこれと江戸の者たちに講釈して回っておるそうな。そなたが知りたいと申すのなら、問い質してもいいぞ」

「すべては終わった話だ。おれも奈緒どのも運命に殉じて（じゅんじる）生きていくしかない」

「磐音、騒ぎは終わってはおらぬ。藩もそなたの身もな」

伊織は宣告するように言うと藩邸に帰っていった。

数寄屋町に戻るために磐音は、富沢町から日本橋川に抜けた。

刻限は昼の９つ半を過ぎていた。

河岸に出ていた露店の薄皮饅頭屋では、仕事を終えた若い衆が群がって饅頭を買っていた。

磐音も柳次郎に買っていくことにして列に並んだ。

魚河岸（うおがし）はすでに商いの峠を超えて、棒手振りや近所の大店（おおだな）の女中たちが商いの魚やら夕餉のお菜（おさい）を探していた。

磐音はそんな人の群れに、おきくの家の小女の姿を認めた。

今夜は、参左衛門が来る日だ。そのための魚を探しているのか。

磐音はそんなことを考えながら饅頭を購い（あがなう）、柳次郎の待つ二階長屋に戻った。

四

「長いこと留守をしてすまなかった」

磐音は柳次郎に饅頭を差し出した。

「こちらは変わったことはありませんか」

「ないない」

と答えた柳次郎が、おいしそうだなと饅頭に手を出した。そして、立て続けに二個ほど食べて冷たくなった茶を飲んだ。

「宮戸川は繁盛のようですね」

柳次郎は鰻裂きの仕事で遅くなったと考えたようだ。

「いやそれが…」

磐音が自分で淹れた茶を啜り、しばらく沈黙した。

「なにかありましたか」

「品川さん、突然旧藩の朋友が長屋を訪ねてきましてね…」

伊織の訪問から昨年の４月に勤番を終えて国許に戻ったのちに起こった大騒動特に元を離れた理由、さらには長屋に武家二人が侵入した経緯から佐々木玲圓先生との面会などを語っていた。そして、最後に、伊織がもたらした懸念までを告げた。

磐音は昨年来の付き合いで品川柳次郎の人柄を信頼できる友と承知していた。だから、すべてを告げたのだ。

柳次郎は目を丸くして磐音の話を聞いた。

それでも二人はおきくの玄関先を見下ろす監視を忘れなかった。

溜息を一つついた柳次郎は、

「坂崎さんがおっとりしているわけだ。ゆくゆくは六百三十石を継ぐ身ですか」

と納得したように呟いた。

「それはすでに遠い昔のことです」

「いや、おれも佐々木先生や朋友どのと同じ考えです。この一件、少しも終わってはおらぬな」

「と思われますか」

「当たり前ですよ、坂崎さん。江戸屋敷やお国の惚けた重役どもが、坂崎さんたちの改革を嫌ったということだ。」

柳次郎の答えが明快だった。

「奴らにしてみれば、坂崎さんらに藩政を刷新されると、これまでの利権（りけん）を奪われることになる。世の中、すべて金で動いているんですよ、坂崎さん」

「とは申せ、我が藩は何満両もの借財（しゃくざい）を持つ貧乏大名です」

「だからこそ頭の黒い鼠が徘徊しているんですよ。藩の重役と御用商人（ごようしょうにん）の癒着（ゆちゃく）、どこにでもある構図（こうず）が坂崎さんの藩にもあるということだ。

今度は磐音が吐息をついた。

「われら三人の幼馴染はそのために斬り合いを強いられたのか」

「河出どのの飲兵衛（のんべえ）叔父（しゅくふ）ごなんぞを取り込み、三人を戦わせる羽目に追い込んだ。首領はよほど狡猾（こうかつ）で力のある人物でしょうな」

となれば、一人しか磐音の頭裏には浮かばなかった。

しかし、それほど豊後関前藩は腐敗した藩なのか。

外はすでに薄暗くなっていた。

小女が格子戸に姿を見せて、玄関の軒行灯（のきあんどん）に明かりを点し、主の参左衛門の到来を待つ支度をした。

「そういえば小女はいつ戻ったのかな」

「魚河岸で見かけたものでな」

「人違いではないですか。あの家からはだれもでかけてはいませんよ」

「これまで何度も見た顔だ。品川さんが見落としたのではないですか」

「そんな馬鹿な…」

「ならわれらは帰ったところも見落としたことになる」

「それもそうだが…」

二人の胸になんとなく釈然としない思いが残った。

四半刻後、下女が夕餉を届けに来た直後、参左衛門の姿を見せた。

「六十をすぎたというのに、３日に一度、お盛んなことだ。」

柳次郎が羨ましそうな顔でぼやいた。

「それがあるから我らは一日二分の稼ぎになる」

「それはそうだが…」

この夜、明石屋参左衛門は五つ半過ぎにおきくの玄関に姿を見せた。見送りに出たおきくの顔にどこか安堵の表情が浮かんでいるそうだ。

「戸締まりをしっかりしてな」

参左衛門はそう言うと、磐音立ちが見張る二階をちらりと見上げた。

「長い夜が始まるか」

柳次郎が独白した。

「品川さん、あの家にもう一箇所出入り口があるのではないですか」

「両側はお店、裏手は溝川ですよ。もしどこぞにわれらが知らない出口があったとしても、小女の目をどう掻い潜るのです」

「それは簡単、世の中、金でなんとでもなるとそれがしに忠告したのは品川さんですぞ」

「それはそうだが…」

「とにかく今晩から炭屋の路地を見張って見ましょう」

磐音は立ち上がった。

「外はまだ寒いですよ」

「仕方ない、仕事です」

包平を手に磐音は階段を下りた。

磐音が炭屋の路地を見張り始めて二日目の夜、それは突然に出現した。

路地の突き当りを流れる溝川に黒板塀が幅二尺ほど下がってきて、溝を架け渡した橋に変わった。天水桶の陰から磐音が見ていると、小女が顔を突き出して路地を見回し、奥へ引っ込んだ。

その間に磐音は表通りに走り、路地の出口に視線を向けた。すると濃紫（こむらさき）の御高おきくだ。

その背後では跳ね橋が元の塀に吊り上げられていた。

おきくは日本橋川に出ると西河岸の辻で籠（かご）を拾った。

磐音は柳次郎に知らせる間がなかった。

一人の判断で行動するしかない。

駕籠は日本橋を渡り、十軒店本石町の筋を右に曲がって、鉄砲町、小伝馬町（こでんまちょう）、さらには旅籠がならぶ馬喰町（ばくろちょう）から浅草御門に抜けた。

両替屋の今津屋を横目に浅草橋を渡った駕籠は、神田川の北岸（ほくがん）を大川へと下がった。

ここまでくれば、いくら朴念仁（ぼくねんじん）の磐音にももはや柳原（やなぎわら）北詰の出会茶屋の一軒がおきくの行き先と察せられた。

駕籠は推量通りに浅草下半（かはん）右衛門町の出会茶屋、一楽の前に止まり、御高祖頭巾（ずきん）のおきくは駕籠代を払う奥に消えた。

磐音はぐるりと裏手に回って、神田川への抜け口がないことを確かめた。

大川から曲がりくねって川風が吹き付けてきた。

磐音は去年の騒ぎを考え直しながら、ひたすらおきくとその相手が出てくるのを待った。

一楽に空き駕籠が戻ってきて、おきく画素の駕籠に乗り込んだのは７つ前のことだ。約束ができていたらしい。

磐音は駕籠を見送り、相手を待った。

男は地味な羽織袴に大小を差した磐音と同年輩（どうねんぱい）、三十前であろうか。

五尺六寸余りの上背（うわぜい）でがっちりした体格をしていた。腰の据わり具合はそれなりの剣の腕を想像させた。

いち楽の常夜灯の明かりに浮かんだその顔には、悦楽（えつらく）の満足感とは異なる寂寥（せきりょう）が漂っていた。

勤番侍とも、御家人や旗本とも雰囲気が違った。かといって、永の浪人とも思えない。

男は浅草橋の方にあがると蔵前御蔵通りに曲がった。

足取りからいってそう遠くないところに住んでいると思われた。

磐音は半丁ほど離れて尾行した。

男は無警戒に浅草瓦（かわら）町の方角に折れた。

磐音は足音を消して走ると左に折れた。すると男が通りの中央で刀の柄（つか）に手をかけて待ち受けていた。

「そのほう、物盗りとも思えぬが」

低い声が問うた。

磐音は手を振ると咄嗟に腹を固めた。

「それがし、怪しい者ではござらぬ。そなた土地と話し合いたい儀があって、いち楽から尾行してきた」

「……」

「危害を加えるようなことはいたさぬ。話を聞いてはもらえぬか」

男は磐音の風体（ふうてい）を確かめるように見た末に、

「この先に八幡社がある」

と言った。

無言農地に二人は小さな八幡社の境内（けいだい）に入った。

「用を申せ」

柄に手をおいたまま相手が言った。

「それがし、明石屋参左衛門どのに頼まれた者…」

男の体が硬直（こうちょく）した。

刀の柄から手が離れた。

「と申せばそなたも用は察せられたようだ。明石屋殿の愛妾おきくどのとそなたは、出会茶屋いち楽で密会を重ねておられる」

相手は否定も何もしなかった。それが正直一途な人柄を示しているように思えた。

「男と女の話に立ち入りたくはないが、仕事でな。お許し願いたい」

磐音が軽く頭を下げた。

「それがし、坂崎磐音と申す、そなたは何と申される」

男は口を噤んで無言を通そうとした。

「そなたが黙っておれば、それがし、蛭のようにぱったりと張り付いておるしかない。話し合っていただけぬか。」

「……」

「明石屋どのが人生の最後に出会うた女性（にょしょう）がおきくどのだそうだ。なんとしても明石屋どのはおきくどのに死に水をとってほしいと願っておられる。」

「……」

「明石屋どのはそなたに百両、いや二百両を進呈しようというておられる」

「そのような大金を得る理由はない」

「おきくどのとの逢瀬（おうせ）をやめればよいこと」

磐音が参左衛門の提案を告げ、言った。

「どうだな、そなたはまだ若い。二百両ものダイキンがあれば、別の女と所帯を持つこともできよう」

男は更に沈黙を守った。

磐音も根気よく相手が口を開くのを待った。

「…もはや遅い」

と男が言ったのは、四半刻も無言の行が続いたあとだ。

「遅いとは…」

「それがし、八王子千人組の広橋忠也（ひろはしちゅうや）でござる。おきくの父親勤造がそれがしの小者であった縁で、おきくとは幼き頃より見知っておった。だが、勤造が病のために職を退き、日野に移り住んで交際は絶えていた…」

八王子千人組は八王子千人同心ともいい、もともとは武田氏の下士で八王子に在住し、一組百人が十組、千人の同心が世襲的に職を得ていた。

徳川時代になって、八王子口を防衛するために継続してこの制度が取られ、お槍奉行の支配下に入れられている。

同心の俸給（ほうきゅう）は三十俵二人扶持、槍は白木（しらき）の樫（かし）の素槍（すやり）であった。

幕臣とはいえ下級武士である。

「…それが勤造の一周忌に招かれ、おきくと逢ったのだ」

磐音は、忠也とおきくは幼い頃から心を寄せ合ってきたのだろうと推測した。

「それがし、おきくの妖しい美しさに魅惑されてしまった。おきくもそれがしに、品川宿での遊女奉公からあやしやの妾になっておることもすべて話してくれた。」

幼馴染はふいに惹かれ合い、男と女の境を越えたか。

「先程もう遅いと申されましたな。千人同心を辞めて江戸に出て参られたということでござるか」

「おきくが江戸に戻った翌々日に八王子を飛び出して、三ヶ月になる。この近くの裏長屋に住んで、おきくとの時折の逢瀬を楽しみに生きてきた。」

「よう話してくだされた、広橋どの」

磐音はしばらく考えを纏めるために沈思した。

「広橋どの、このような男と女の逢瀬は長くは続かぬ。なにせ相手は他人の持ち物、明石屋どのはおきくどのをゆくゆくは女房にとも考えておられる。町奉行所に訴えられば、密通の罪にさえ問われかねない。そうなると、そなたらには自滅の途しか残されておらぬ。」

磐音は少し脅かしつけるように言った。

「どうです。この際、二百両を手に再出発なされては」

忠也は思い沈黙を続け、口を開いた。

「…できるであろうか」

「それしか、そなたが生きる途はない。そなたもおきくどのも一場（いちじょう）の夢は見られたのだ。これ以上、逢瀬を続けていても奈落（ならく）が待っているだけ…」

「いかがすればよい」

「もはやおきくどのには近付かぬ、江戸から離れるというそなたの一札（いっさつ）と交換に、それがしが明石屋どのから預かってきた二百両を渡す。それでいかがかな」

「いつのことだ」

「今宵五つ、この場所ではいかがか」

「相分かった」

広橋忠也は磐音を見ると小さく頷き、

「それがしの長屋はこの裏手、札差伊勢屋半右衛門どのの家作にござる」

というと磐音の前から姿を消した。

坂崎磐音から話を聞いた品川柳次郎は、

「おきくは幼馴染と明石屋の旦那の二股をかけていたのか」

と呆れたように言った。

「するとここの見張りも終わりだな」

「ということですね」

磐音は広橋忠也と別れたあと。大川を渡って宮戸川の鰻の仕事に行った。そして、数寄屋橋に引き返してきたところだ。

刻限は昼前だ。

「あとは明石屋に報告して二百両を預かり、相手に渡せば終わりですね」

「品川さん、今の話、明石屋どのに報告してくれぬか。それがし、徹夜仕事で少々くたびれた。これから長屋に戻って眠りたい」

「承知しました」

二人はおきくの家の見張り所を閉じると表通りに出た。

明石屋に向かう柳次郎と分かれた磐音は、両国西広小路の今津屋に立ち寄り、老分の由蔵とおこんに上野伊織の一件を頼んだ。

「坂崎様の旧藩の同僚どのの手紙をお預かりすればよろしいのでございますね」

「面倒ではござろうがよしなに頼む。他にのような願いをいたすところを知らぬでな」

「承知しました」

と由蔵が胸を叩き、おこんが、

「疲れた顔して、風呂にでも入って寝た方がいいわ。またまた奇妙な仕事ばかり引き受けているんじゃないの」

と歯切れよく言い、送り出してくれた。

夕刻、柳次郎に言わねは起こされた。

「坂崎さん、俺の信用も大したことないな」

「どうしました」

「明石屋の番頭がついてきた」

「若い番頭が胸前に金包み（かねづつみ）を可が得て戸口に立っていた。

「すぐ支度します」

磐音は寝間着（ねまき）を、よれよれの袷と裾の切れた袴に着替えた。あとは大小を指し落とせばそれでしたくは終わりだ。

「またせたな」

番頭が頭を下げて、

「明石屋の恭蔵（きょうぞう）にございます」

と挨拶した。

「よしなにな」

恭蔵と柳次郎は六間堀に猪牙舟を待たせていた。

二百両の大金を考えてのことか。

柳次郎と磐音は舳先（へさき）に座った。

恭蔵は真ん中に腰を落ち着けた。

「明石屋はおきくに情夫がいたことより、あの家に隠し裏口があることに驚いていました。

前も持ち主が妾を囲うために新築した家だという。参左衛門が買った時、前の持ち主はなくなっていた。それで見たままに買い取ったのだそうだ。家の手入れはさせたが塀までは考えなかったという。

「明石屋どのは、広橋どののことをおきくに詰問したのですか」

「いや、本日のことが落着した後、尋ねるそうです。年をとって若い女を囲うのも大変だな」

二人はひそひそと囁き合った。

「まあ、われらには生涯縁なきことであろう」

猪牙舟は竪川が大川を横切り、神田川を浅草橋まで遡って橋際に止められた。

恭蔵の持つ二百両を護衛して柳次郎と言わねが前後を固め、浅草御蔵前通りから福井町の八幡社（はちまんしゃ）の境内にたどり着いた。

広橋忠也の姿はまだなかった。

「ちょっと早かったかな」

三人は四半刻ほど待った。

「おかしくはありませんか」

恭蔵が言い出し、磐音が、

「長屋を訪ねてみるか」

と忠也が歩み去った方角へ歩いていった。

探しあてた札差伊勢屋半右衛門の長屋にも広橋忠也の姿はなかった。

部屋の様子は、もはやそこへ住人が戻ってはこぬような散らかり方だ。

「八王子に戻ったかな」

「坂崎さん、手切れ金（てぎれきん）の二百両もてにしないでですか」

柳次郎が首をひねった。

「まさか…」

「もしや」

二人が言い合い、柳次郎が、

「恭蔵さん、数寄屋橋に大急ぎでもどろう」

と走り出した。

数寄屋町のおきくの家から女の悲鳴が響いた。

磐音立ち三人が飛び込んだのはその時だ。

玄関から廊下伝いに奥の間に駆け込むと、広橋忠也がおきくの手を引き、血に濡れた抜き身を下げて立っていた。

「旦那様！」

恭蔵が叫んだ。

参左衛門は忠也から肩口を斬られたか、血塗れになりながらもおきくの足に縋っていた。

「おきく、行くな。行くでない。なんでも買うてやるぞ」

その顔が狂気に憑かれて見えた。

「広橋どの、なぜ約定を破られた」

磐音が詰問した。

「…一度は考えた。だが、おきくを忘れることはできなかった」

忠也が肺腑を抉るような言葉を吐いた。

「おきくはだれにも渡さぬ、私のものじゃ」

参左衛門が叫び返し、おきくの足から腰に縋り上がった。

「い、嫌です」

おきくが呻くように言い、恭蔵が、

「あ、あなた方、何をしておられる。こやつらを捕まえてくだされ」

と叫んだ。

その拍子に、胸に抱いていた金包みがばらりと落ちて、畳に黄金色の小判（こばん）が散った。

「おのれ下郎（げろう）め、金でなんでもできると思うな！」

広橋チュやが下げていた抜き身で恭蔵を斬りつけた。

ふいを食らった恭蔵の額に浅い傷が走った。

それが忠也を錯乱させた。

「おきく、そなたと死のうぞ！」

「はい」

「その前にこやつらを切って斬り伏せる！」

磐音はもはや男女がのっぴきなあらぬ狂気の淵にたっていることを思い知らされた。

「広橋どの、刀を捨てなされ」

「おのれ、賢しら（さかしら）顔で説教しおって！」

忠也はおきくの手を離すと血刀を両手に持ち替え、上段に振りかぶると磐音に斬りつけてきた。

狂気に憑かれた者の軒は尋常（じんじょう）の力を超えて、鋭く袈裟懸け（けさがけ）に落ちてきた。

だが、太刀の切っ先が天井を切り割り、その分、斬撃が遅れた。

磐音は腰を沈めて横に飛び、一撃目を躱した。

忠也はにの太刀を大きく胴に送ってきた。

もはや刄を交えるしかない。

磐音は脇差しを抜いた。

その瞬間、忠也が迫っていた。

磐音は敢然（かんぜん）と忠也の懐に飛び込むと脇差しを小さく振るった。

峰に返す暇のなかった脇差しが忠也の脇腹を深々と裁ち割った。

磐音は立ち竦む（たちすくむ）忠也の傍らを擦り抜けた。

忠也が顔面から畳に突っ込むように倒れこみ、手にしていた血刀が庭に飛んだ。

「おきくどの！」

おきくが座敷の奥へ走り、柳次郎が追いかけた。

「明石屋どの、しっかりなされ」

磐音は手拭いで参左衛門の肩口の傷を押さえた。だが、傷は意外に深く、たちまち手拭いが真っ赤になった。

「番頭さん、そなたの傷が浅い。まずは主どのだ。知り合いの医師を呼んできてくだされ！」

「は、はい！」

恭蔵が部屋から転がり出ていった。

夜明け、坂崎磐音と品川柳次郎は萱場町（かやばちょう）の大番屋を出た。

番頭の恭蔵の知らせに北奉行所が出張り、調べに当たった。

磐音に斬られた広橋忠也と、柳次郎の手を逃れて井戸に飛び込んだおきくが亡くなり、明石屋参左衛門が瀕死の怪我で生死のさかいを彷徨い、恭蔵が浅手（あさで）を負っていた。

当事者で無傷（むきず）なのは磐音と柳次郎と小女だけだ。

三人は大番屋に連れて行かれて北町の定廻り同心にたっぷり絞られて、事件の経緯を何度も聞き取られたのだ。

恭蔵と小女の証言もあって、二人は差し当たって罪には問われないことになった。

「坂崎さん、またただ働きだ、すまぬことです」

と柳次郎が謝ったのは両国橋の上だ。

「なあに、相身互いです」

「あああ…」

柳次郎が嘆息し、磐音が応じた。

「それがしは宮戸川に行って鰻裂きだ」

「金になる仕事はなかなかないものですね」

吹き上げてきた川風に柳次郎の声が流れた。